



Data

監督: ホアン・ミンチェン (黄銘正)
ナレーター: クー・イーチェン (柯一正)
声の出演: 本間岐理、ヤン・ホエイルー (楊惠茹)
出演: 富永勝/家倉多恵子/清水一也/松本治盛/中村信子/片山清子

👁️👁️ みどころ

中国語のタイトルだけで本作の意味がわかるから、私の中国語のレベルもアップしたもの！そんな自信をもって本作の鑑賞に臨んだが、スクリーン上で語られる中国語も字幕付きなら大体オーケー・・・？

過去3度台湾旅行に行った私でさえ台湾のまが懐かしいのだから、戦後「回家」した「湾生」たちが再び故郷を訪れれば感無量になるのは当然。出演者は全員こんな企画に「謝謝！」。

もっとも、観客は年寄りばかり。今の時代を生きる日本と台湾の若者たちこそ『君の名は。』（16年）ではなく、本作を観て欲しいのだが・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■ ■ 湾生とは？ 回家とは？ ■ ■

私のように中国語検定の3級合格者ともなると、「湾生」とは台湾で生まれた人のこと、「回家」とは故郷へ帰ることだということはすぐにわかる。多くの日本人農業従事者が「官営移民」によって台湾に渡ったのは、大きく分けて明治42年～大正6年（1909～1917年）と昭和7年（1932年）以降だそうだが、他にも民営移民もたくさんあった。

本作には富永勝、家倉多恵子、清水一也、松本治盛、中村信子、片山清子ら6人の「湾生」の老人が登場するが、彼らが生まれたのは昭和一ケタから10年代。また、その出身地は台北と花蓮だ。日本人の多くが台湾の蘇澳や花蓮、台東など東部に入植したのは、漢民族の入植が西部に比べて進んでいなかったため。つまり、土地が入手しやすく集団居住しやすかったためだ。

子供時代を生まれた国・台湾で過ごした彼らは、1945年8月15日の日本敗戦後、「外

地」の台湾から否応なく「内地」の日本に引き上げざるをえなくなったが、さて彼らの故郷を離れることへの想いは如何に・・・？

■社会問題作もいいが、素朴なドキュメンタリー映画も！■

私は過去3度台湾旅行に行ったが、そのたびに台湾人の日本（人）びいきぶりを感じてきた。日本と台湾との関係を描いた映画には、一方で先住民セデック族による抗日暴動を徹底的に日本軍が弾圧した「霧社事件」をテーマにした魏徳聖（ウェイ・ダーション）監督の『セデック・バレ』（11年）のような超問題提起作があり、他方で野球を通じた日本人と台湾人との濃密な交流を描いた馬志翔（マー・ジーシアン）監督の『KANO 1931海の向こうの甲子園』（14年）（『シネマルーム35』290頁参照）のようなホンワカした日台友好映画があるが、本作のような素朴なドキュメンタリー映画は珍しい。

ちなみに中国映画でも、陸川（ルー・チュアン）監督の『南京！南京！』（09年）、張芸謀（チャン・イーモウ）監督の『金陵十三釵（The Flowers Of War）』（11年）（『シネマルーム29』98頁参照）のような超問題提起作や王兵（ワン・ビン）監督の『無言歌（夾辺溝／THE DITCH）』（10年）（『シネマルーム28』77頁参照）、『三姉妹～雲南の子（三姉妹／Three Sisters）』（12年）（『シネマルーム30』184頁参照）、『収容病棟（瘋愛／TIL MADNESS DO US PART）前編』（13年）（『シネマルーム34』285頁参照）のような超深刻なドキュメンタリー映画があり、他方で『延安の娘』（02年）（『シネマルーム5』373頁参照）のような素朴なドキュメンタリー映画がある。

上記のような台湾映画や中国映画の問題提起作はたしかにすごいが、本作のように素朴なドキュメンタリー映画もたまにはグッド！

■湾生たちの回家はあくまで温かく！■

富永勝をはじめとする主要な6人の「湾生」たちの「回家」はホアン・ミンチェン（黄銘正）監督以下40名近い撮影隊の協力によるものだから、富永勝たちはそんな企画をさぞ喜んだことだろう。しかし他方で、1945年の敗戦による日本への帰国から既に70年を経た今、「湾生」たちの故郷である台北や花蓮に「回家」しても、彼らが生活していた村は今もあるの？同世代の友人・知人たちは今なおそこで生活しているの？そもそも、今では日本語が通じなくなっているのでは？さらに、今の2世3世の若者たちは80歳～90歳となっている富永勝たちの世代に何の関心も示してくれないのでは？富永勝たち湾生はそんな多くの不安をもって回家したはずだ。

ところが、回家した富永勝たち湾生を迎えたかつての村の住人たちの歓迎ぶりはどうだ。一目顔を見たり、ひと言名前を聞いただけですぐに記憶が蘇り、さらには亡くなった人の息子の顔を見て「おやじそっくりだ」とすぐに気づいたり、70年ぶりの再会とは思えな

い溶け込み方はすごい。私はドキュメンタリーものはあまり好きではないが、本作のようなドキュメンタリーはホントに胸キュン・・・。

■老人向けと若者向けが完全に二極分化！■

日本でも朝日新聞を中心に格差社会の広がりを批判する論調が強いが、日本以上の「学歴社会」でかつ「コネ、人脈社会」の韓国では、格差の広がりは日本よりひどい。そのことが昨今の朴槿恵（パク・クネ）大統領の「弾劾」にまで至った大規模デモの原因だが、さてその解決策は・・・？

それはさておき、『キネマ旬報』2016年12月上旬号で3人の評論家の星が2つ、2つ、3つと低かった本作だが、私が鑑賞した日の観客は意外に多かった。しかしそこでの問題は、私を含めて観客が老人ばかりで若者が1人もいないことだ。今年の邦画最大の話題作は7月に公開された『シン・ゴジラ』（16年）（『シネマルーム38』22頁参照）で、その興業収入は約80億円。ところが、その後に公開された新海誠監督の『君の名は。』（16年）があればあれよという間に観客を集め、公開102日目にあたる12月5日までに興行収入が200億円を突破し、308億円の記録を持つ『千と千尋の神隠し』（01年）に続く邦画歴代第2位になっている。私はそんな風潮にあえて抵抗して同作を観ていないが、聞くところによると同作を観たおじいちゃん、おばあちゃんは「主人公は真知子さんじゃなかったの？」「なぜ真知子さんが出ていないの？」と言っていたそうだ。今や、老人と若者の情報格差はここまで広がっているわけだ。

本作では富永勝、家倉多恵子、清水一也、松本治盛、中村信子の5人はまだまだ活動的な老人だから、本作の企画を十分楽しみかつ喜んでいることがハッキリわかるが、片山清子だけは寝たきりだから、日本の岡山にあるはずのお墓や戸籍についての報告を聴くだけ。しかし、その子供、孫、ひ孫たちの行動力と本作スタッフの協力によってさまざまな情報が集まると、その都度喜び涙ぐむことに・・・。本作の企画、製作によって登場人物たちは大いに喜ぶことができたし、それぞれの立場と視点から本作を鑑賞した老人たちはそれぞれ満足できたはずだが、さてそれだけでいいの？ホントは今の時代を生きる日本と台湾の若者が本作を観て歴史を考えてこそ、本作のホントの意義があるのでは・・・？

2016（平成28）年12月20日記